心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ㉗

※チラシは偶数月の第一日曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

「プリーズ」の思い出

今から10年ほど前、新潮新書から竹内一郎著『人は見た目が9割』という本が発売されて話題になりました。見た目が良いに越したことはないですが、見かけによらないことを実感させられる出来事を忘れられず、折に触れて思い出しては感慨深くなっています。

私が山陽本線を使って電車通学をしていた中学生時代のことです。その時はラッシュアワーと重なっており、電車内の座席はほとんど空いていませんでした。そんな中、倉敷駅から外国人の老夫婦が乗って来ました。満席状態のため、手すりを持ち立っていると、そばの四人掛けシートに座っていた短ランにボンタンという、一見やんちゃそうな男子生徒四人がザワザワし始めたのです。「お前が言えよ」「どう言えばいいのかわからない」といったようなことを口にしていました。

ほどなくして、その中の一人が立ち上がり、席を指さして「プリーズ」と一言。その瞬間、がやがやしていた車内が水を打ったように静まり返りました。私には彼がまるで紳士に見えたことを覚えています。

高校生から席を譲られたご夫婦は「サンキュー」と言って並んで座り、「日本の学生は親切ね」といった意味合いの会話をしていました。

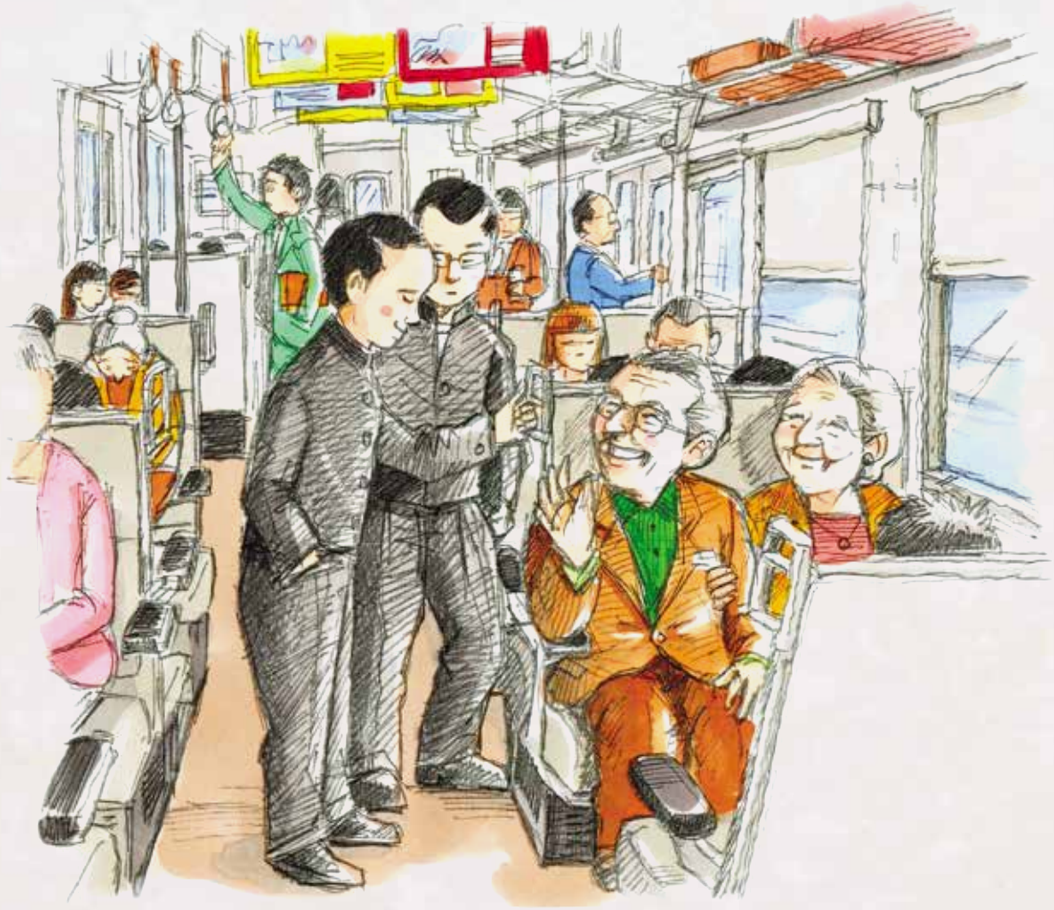
席を譲った高校生は照れや恥ずかしさなどからでしょう、顔を真っ赤にしていましたが、その表情からは自身の英語が通じたこと、善い行いができたことをうれしく感じているような印象を受けました。

静寂は束の間で、すぐに賑やかな車内に戻りましたが、いつもはどちらかといえば疎まれる、変形の学生服を着た高校生が周囲から見直された瞬間でした。

今でこそ外国人を見かけることは日常的になっていますが、私が中学生だった約40年前の倉敷界隈では珍しかったと思います。私の場合、席を譲るだけでも勇気を出さなくては行動に移せません。それが外国人に対してとなると、言葉の違いが妨げになり、気づかない振りをしようかとさえ思います。

先日、偶然にも電車内で寝た子どもを腕に抱え、背中に大きなリュックを背負ってつり革を持っている外国人の女性を見かけました。電車が揺れるたびに体がフラフラする後ろ姿を見て、危ないと感じながらもなかなか席を譲ることができませんでした。それでも何かあってからでは遅すぎると意を決して声をかけました。

大層にと思われる方がいらっしゃるかも知れませんが、外国人に席を譲ることは想像以上に勇気が必要でした。そう実感すると同時に「プリーズ」と声をかけた高校生の勇気の大きさ、行動力、人を見かけで判断してはいけないことを改めて思い知りました。



人知らずとも、わが良心これを知る。 新島襄

誰にでも良心があり、その良心は全てを知っているものなのです。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト
アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。